

難病患者の就労支援活動

H25年1月16日午前、中北保健福祉事務所にて第2回難病患者就労支援ミーティングを開催しました。

このミーティングは、難病相談・支援センター事業としてH22年3月に新たに加えられた「難病患者就労支援事業」を推進していくために設置する「難病患者就労支援協議会」の準備会として開催しました。第2回のミーティングには、山梨労働局職業安定部職業対策課、山梨障害者職業センター、ハローワーク甲府、すみよし障がい者就業・生活センター、難病・疾病団体連絡協議会、県福祉保健部健康増進課および障害福祉課の関

係者にご協力いただきました。ミーティングでは、第1回ミーティングを踏まえて作成した支援体制(案)、初期アセスメントシートおよび支援計画シート等をもとに、既存の制度やネットワークを取り入れた支援の流れ、関係機関と連携を図るための方法について検討し、有意義な意見交換をすることができました。今後、関係者の多忙な業務の中で効率的で有効な連携をどのように図っていくか、難病患者を受け入れる事業者をどのように開拓していくかが課題となります。実際に事例を支援していく中で、更に検討を重ねて参ります。



同日13:00~18:00、同会場にて難病患者就職セミナー・就労個別相談会を開催しました。個別相談利用 7ケース(9名)

センターでは、就職活動をサポートするためのリーフレット「難病がある人の就活ガイド」を作成しました。就労関係機関、保健所、公立病院医療相談室等に配布しておりますので、活用してください。



難病を発病後、センターに就労相談に来られ、転職、再就職を果された3人の方の手記をご紹介します。

就業を目指す皆さんへ

膠原病友の会 大野 幹夫

私が家業の内装工事業からの転職を考え始めたのは、厳しい労働環境で働くことに限界を感じてきたことがきっかけでした。それというも、真夏の工事現場の気温は40℃、真冬の気温は氷点下ということも珍しくなく、特に体を冷やすと眼の炎症を起こしてしまう私の身体には冬の氷点下の気温は、とても厳しいものでした。炎症が起きてしまうと病院へ通い、眼注(眼の周りにする注射)をしてもらわなければならず、工事関係者の方々にとっても迷惑をかけてしまいました。

そんな日々を繰り返すうちに、「自分のように持病を抱えて悩んでいる人や、その他色々な事で困っている人を助けてあげたい、力になりたい」という思いが段々と強くなってきて、『福祉の仕事に就いたらどうだろうか?』と思い始めたのです。自分自身がとても困っているのに、困っている人の気持ちは誰よりもわかるのではないかと思ったのです。そこでまず、誰かに相談してみようと思い、一番最初に頭に浮かんだのが、難病相談・支援センターの相談・支援員さんでした。相談・支援員さんは、いつ相談にいらっても親身になって一緒に考えてくれますし、相談・支援員さん自身が看護師なので、福祉の仕事のことは、良くわかるのではないかと思ったのです。そして、実際に相談に伺い、提案されたのが介護の仕事でした。そして、就業するなら資格があった方が良くということで、就業支援センターでヘルパー1級の資格を取得しました。

現在は老人保健施設で介護職員として働いています。体力的にとっても大変ですが、何とか体調を整えながら頑張っています。また、将来的には介護福祉士や社会福祉士などの資格を取得してステップアップしていけたら良いなと思っております。

就職活動を通して、これから就業を目指す皆さんに

お伝えしたいことは、まず「自分を見つめ直してみる」「自分自身をよく知る」ということです。何を今さらという方もいらっしゃると思いますが、自分の長所や短所、自分はどんな性格なのか?、何が好きで何が嫌いなのか?、など実際に紙に書き出してみると改めて自分のことがわかってくるものです。病気があっても、なくても「自分を知る」ことは就職活動をするにあたっては大切なことで、何よりも「何がしたいか」という思いが重要なことです。また、周りの人から自分はどういう人間だと思われているのか?、例えば、両親、兄弟、姉妹、友人、恋人等に、少し勇気が必要ですが尋ねてみると、意外、自分の事をわかってくれていることに驚かされると思います。そんな所から新しい突破口が発見できるかもしれません。もしかしたら、こんな職業が向いているのではないかと提案してくれる人が出てくるかもしれません。要するに、自分を見つめ直して自分をよく知り、自分がどんなことをしていきたいのかがわかれば、自ずと目指す方向性が見えてくるような気がするのです。また、もしあなたにやりたい事があるのなら『出来るだろうか?』『出来ないだろうか?』と悶々と悩んでいるより、思い切って挑戦してみたらどうでしょうか?。失敗したっていいじゃないですか、失敗はどんどんしよう!、失敗は成功のもと!と言いますよ。

実際、私だって、今の職場で失敗の連続でいつも怒られています。ただ、怒られると同じ事で怒られないように気をつけるので、その仕事を覚えてしまうのです。私が思うに、たとえ何度失敗しようとも、一つの目標に向けて学び、努力していく過程は、かけがえのない体験で、決して無駄なものではなく、自分を成長させてくれると思います。失敗を恐れず、目標に向かって初めの一歩を踏み出してみたらどうでしょうか?。その先には、きっと良い結果が待っていると思います。偉そうなことを言いましたが、最後に皆さんが自分の望む職業に就き、心身共に充実した日々を送ることができるよう心から祈っております。

難病の診断から再就職まで

48歳 男性

私は2006年秋「拡張型心筋症」と診断されました。当時デスクワークが主で肉体的な負担が少ない業務でしたが、さらに残業の制限など上司と相談し、何とかやりくりしていました。そんな折、2011年の夏、会社都合で退職をいたしました。就職活動の始まりです。

ハローワークへの登録はもちろん、退職時に会社側で契約していただいた公的機関「産業雇用安定センター」や職業斡旋会社「リクルートキャリアコンサルティング」等を利用し、今までの職務経歴を把握する事、自分にできる事は何か・・・という考えの基、就活に励みました。また、難病相談・支援センターでの「難病患者就労個別相談会」にも参加し、当時所持していなかった障害者手帳の取得を勧められ、申請、認定され「障害者枠」での雇用を探しました。併せて、「すみよし障害者就業・生活支援センター」や「山梨

障害者職業センター」などの支援機関にも登録させていただきました。そして、昨年秋の「障害者合同面接会」で面接いただいた会社に本年1月より雇用される事になりました。

この間思った事は、さまざまの人が自分を支えてくださっているという事です。主治医の先生、再就職へ向けて応援していただいた方々、前職場・現職場の皆さん、友人。

そして、その恩に報いるために自分に何が出来るか? 今は毎日を休む事なく体調に留意して労働する事だと思っています。趣味などを楽しむ事もそうでしょう。しかし、これからも折りに触れ、その問いかけは出てくると思っています。その問いかけに答えを見つけ出せるよう頑張っていきたいと思っています。難病という病気を患った者だから出せる答もあるでしょう。

最後に今までお世話になった人、これからもお世話になるであろう人達に感謝したいと思います。

明るく楽しい生活を

33歳 男性

私が自分の体に異変を感じたのは、平成22年4月ごろでした。最初は、左手の薬指と小指にしびれを感じ、腱鞘炎かと思い整形外科を受診しました。半年ほどさまざまな治療を受けましたが改善せず、3か月程で肘から指先まで、半年後には左足までしびれるようになりました。当時勤めていた会社の健康診断で相談した際に神経内科を紹介されました。その後、左手の握力が一桁にまで低下し、歩行がうまくできなくなり、味覚と臭覚が鈍るなどの症状が現れ、平成23年1月から入退院を繰り返しました。仕事は休業状態で、収入は傷病保険だけの苦しい生活の中、「抹消神経障害」と診断され、完治はないと告げられたのはH23年6月頃でした。すでに結婚して、翌年には子供が生まれる予定であったので、絶望感で何も考えられない日々が続きましたが、それでも治療を続けた結果、指先は上手く使えませんが、握力はある程度回復し、歩行はつまづくことはあるものの少しの時間なら問題ない程度まで回復しました。子供が無事生まれたこともあり、H24年3月に仕事に復帰しましたが、会社は業績不振から人員削減の状況で、復職後わずか2か月で無職になってしまいました。

「就職が決まりました」と電話の向こうで、あるいは、センターを訪れて報告していただく時、「良かった」と心から喜びを分かち合う瞬間です。

就職決定までの過程には、言葉では表せないほどの様々な苦労や辛い経験があったことを思うと、乗り越えた強さを感じます。そして、就労を継続していくこれからの生活が更に充実するように、個々のニーズに応じてサポートする必要性を実感します。



今年度、2月末現在のセンターへの就労相談件数は、延べ72件になっており、利用者は年々増加しています。疾病を受け止め、どうしたら就職できるか、就職について前向きに積極的に考えている方は、制度やサービス、支援関係者の助言やサポートを上手に活用して、就職しています。まだ、就職は無理という段階から就職準備は始められます。就労に向けてできることからすすめてみましょう。